

【書評・紹介】

叢書「知られざるアジアの言語文化」1-8号

(東京, 雄山閣, A5判)

山田 敦士

叢書第3号 山田 敦士著 2009年

本叢書は、評者も参加する、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所における共同研究プロジェクト「タイ文化圏の歴史的研究」(代表者:ダニエルス・クリスチャン東京外国語大学名誉教授、2006-2010年度)および「東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触:タイ文化圏を中心として」(代表者:ダニエルス・クリスチャン東京外国語大学名誉教授、2011-2013年度)による調査研究活動成果の一部である。

1. 東南アジア大陸部山地民の世界

本叢書の舞台となる中国西南部から東南アジア大陸部山地にかけては、人びとが山地と盆地(平地)という異なる生態空間において棲み分けをおこなっている。従来、当地の歴史と文化は、「国家」をもつ盆地の定住民社会と、「国家」をもたない移動性の高い山地民社会という二項対立的概念によって説明されてきた。今日のタイや中国といった近代国家によって国境線が引かれる以前、当該地域はタイ系民族を中心とする盆地国家の興亡の舞台であった。こうした「国家」を中心とした歴史観においては、山地民は国家建設を妨げることはあっても、貢献することのない存在でしかない。つまり、山地民は歴史の主観にはなりえないのである。

こうした二項対立的視点、ないしは国家の枠組みからの視点によって描かれた山地民像は果たして真の姿なのだろうか。こうした疑問に端を発し、山地民の立場から当該地域の歴史をとらえ直すという新しい発想から、上記研究プロジェクトが発足した。プロジェクトの目的は、タイ系民族が盆地で政権を営み、山地民がそれに直接的・間接的に関与するという構図をもつ「タイ文化圏」およびその周辺地域の歴史動態の解明を目指すことにある。

2. 叢書「知られざるアジアの言語文化」

叢書「知られざるアジアの言語文化」は、上記共同研究プロジェクトによる成果の一部として企画されたものである。編者(ダニエルス・クリスチャン東京外国語大学名誉教授)はそのまえがきにおいて、「多数民族は自己が立てた標準に彼らが達しないことや思考法が彼らと異なることを理由に、少数民族を解ろうと努力してこなかった向きがあります。人間の表現は、音で意思を伝達する言葉と、符号で意味を伝達する文字に頼っています。言語が異なると意味が通じないのは自明のことわりですが、その言語を習得すれば、言葉の背後に潜む思考法も理解でき、他者の文化的価値観を知る能力が増大することは確

かです」と述べ、当該地域の諸民族をめぐる学術的情報の偏りを指摘する。そして、「幸い、近年、アジアの少数民族のあいだで長期のフィールドワークをすすめ、多くの困難を克服して彼らの言語と文字を習得した若手研究者が増えています。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所では、これらの若手研究者を共同研究プロジェクトに迎え入れて、所員とともにさまざまなオーラルと文献の資料を和訳し公表することになりました」とその企画意図を述べ、本叢書を「少数民族が自身の言語で叙述した歴史と文化に関する口頭伝承や文献を和訳することによって、彼らに対する理解を深め、その思考法に一步でも近づくためのシリーズ」、「より多くの読者が少数民族固有の価値観を熟知するきっかけ」と位置付ける。

叢書は2008年の初刊以来、すでに8号を数える。以下にその一覧を示す。

- 第1号 新谷忠彦 訳著『タイ族が語る歴史：「センウィー王統紀」「ウンポン・スィーポ王統紀』』（東京、雄山閣、2008年4月、A5判、7344円）
- 第2号 チャレ 著、片岡樹 編訳『ラフ族の昔話：ビルマ山地少数民族の神話・伝説』（東京、雄山閣、2008年4月、A5判、6696円）
- 第3号 山田敦士 著『スガンリの記憶：中国雲南省・ワ族の口頭伝承』（東京、雄山閣、2009年4月、A5判、6912円）
- 第4号 立石謙次 著『雲南大理白族の歴史ものがたり：南詔国の王権伝説と白族の観音説話』（東京、雄山閣、2010年4月、A5判、7344円）
- 第5号 樫永真佐夫 著『黒タイ年代記：「タイ・プー・サック」』（東京、雄山閣、2011年3月、A5判、6696円）
- 第6号 黒澤直道 著『ナシ族の古典文学：「ルバルザ」・情死のトンバ経典』（東京、雄山閣、2011年11月、A5判、6912円）
- 第7号 樫永真佐夫 著『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」：村のくらしと恋』（東京、雄山閣、2013年3月、A5判、6912円）
- 第8号 長谷千代子 訳著、岳小保 共訳『シャンムーン：雲南省・徳宏タイ劇の世界』（東京、雄山閣、2014年3月、A5判、6480円）

これまでの対象は、盆地国家の主体であるタイ系民族（第1、5、7、8号）に加え、山地民のラフ族（第2号）やワ族（第3号）、さらにタイ文化圏の外縁にて他文化圏（チベット、中華）とのかかわりをもつナシ族（第6号）や白族（第4号）である。その内容は、少数民族の文字による文献および聞き取りによって採集されたオーラル資料のテキストからの翻訳を中心とし、第三者、つまり多数民族の言語と文字を借りて自己表現したものも含む。各民族の言語文化や歴史がテキストとともに解説されており、それぞれを読み比べることで、民族文化の共通性や多様性を知ることができる。多数民族からみた従来の概説書とは一線を画す、新しい視点による記述となっている。

3. 共同研究と叢書のこれから

タイ文化圏研究は、新谷忠彦（東京外国語大学名誉教授）に提唱されて以来、本年で20年が経過した。2015年度からは、その後継プロジェクトとして、上記執筆者である若

手のフィールドワーカーが参加するかたちで、評者を代表とする新しい共同研究「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」（代表者：山田敦士日本医療大学准教授、2015-2017年度）が発足する。新プロジェクトでは、テキストやその基盤となる文字表記をテーマとし、タイ文化圏とその文化的接触をなすチベット文化圏、中華文化圏、ビルマ文化圏などの歴史動態の解明を目指す。本叢書の刊行に始まる、当該地域の言語文化の資料化について、引き続き積極的におこなっていききたい。

(やまだ・あつし／日本医療大学保健医療学部)